



神奈川県立  
川和高校

学校改革

# 教師個々の実践が 徐々に浸透し、 変革が進む学校に

◎校訓は「誠実・勤勉・質朴」。2010年度から6年間、神奈川県「学力向上進学重点校」、16年度は「学力向上進学重点校エントリー校」の指定を受ける。文武両道の具現化を目指しており、全国大会や関東大会への出場が常連という部活動も多い。

設立	1962(昭和37)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約320人
2016年度入試合格実績(現役のみ)	国公立大は、北海道大、東北大、東京大、東京外国語大、東京工業大、横浜国立大などに74人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ1002人が合格。
住所	〒224-0057 神奈川県横浜市都筑区川和町2226-1
電話	045-941-2436
Web Site	<a href="http://www.kawawa-h.pen-kanagawa.ed.jp">http://www.kawawa-h.pen-kanagawa.ed.jp</a>

## 変革のステップ

### 背景

◎教師が現状に満足しており、生徒の能力を伸ばし切れていなかった。大学入試に向けた学習も生徒の主体性に任せていた

STEP 1

### 実践

◎教師個々の実践を徐々に浸透させる形で、授業や進路指導を見直す。また、部活動を通して、生徒と教師、生徒同士の信頼関係を構築

STEP 2

### 成果

◎授業改善が進むとともに、生徒と教師が一体となって受験に向かう雰囲気整い、国公立大学合格者数も大幅に増加

STEP 3

**現状に満足して、  
課題意識が希薄なことが課題**

神奈川県立川和高校は、ここ数年で進学実績が大幅に伸び、2015年度入試で初めて現役の国公立大学合格者数が70人を突破した。5年前のほぼ2倍だ。躍進の大きな要因は、10年度に神奈川県「学力向上進学重点校」の指定を受け、授業や進路指導のあり方を見直したことにある。進路支援グループ総括の榎本一弘先生は、改革前の課題を次のように振り返る。

「本校では、伝統ある進学校としての指導が確立されており、生徒や教師たちにそれ以上を求める雰囲気がありませんでした。学校全体として、特に課題を感じていなかったことが課題だったといえます」

大学入試に向けた学習についても、生徒の主体性に任せるという文化があり、そのため、生徒も学校を積極的に頼ることが少なかった。

「2年生の頃から、志望学部の実験には必要のない科目の授業中に、他科目の学習をする生徒が出てきていました。そういった生徒は少数でしたが、学級全体の集中力が低下するなどの悪影響を及ぼしていたと思います」  
(榎本先生)

生徒の高い能力を十分に伸ばし切れていないことに課題を感じて、指導を工夫する教師もいたが、あくまでも個人の取り組みにとどまっ

いた。それが、「学力向上進学重点校」の指定をきっかけとして、徐々に教師間で方針や意識の共有が図られていき、学校全体の取り組みに発展していった。

## 教師個々でできることに取り組み、自然な形で校内に浸透させていく

同校は、「学力向上進学重点校」の指定を2期6年間受けたが、一貫して「無理をし過ぎない」改革に取り組んできた。平容久たらいやすひさ副校長は、次のように説明する。

「無理をし過ぎると必ず反動が生じ、教師や生徒が疲弊するなどの弊害が出やすくなります。そのため、最初から学校全体で一斉に



平容久 たらいやすひさ  
神奈川県立川和高校副校長  
教職歴32年。同校に赴任して2年目。「努力する人は希望を語り、怠ける人は不満を語る」



榎本一弘 えのもと・かずひろ  
神奈川県立川和高校  
教職歴32年。同校に赴任して8年目。学力向上進学重点委員長。進路支援グループ総括。「諦めたら、そこで試合終了」



三好純代 みよし・すみよ  
神奈川県立川和高校  
教職歴7年。同校に赴任して2年目。進路支援グループ。「主役は生徒、教師はサポーター」

始めるのではなく、まずは気がついた教師から実践し、その取り組みがじわじわと全校に浸透していったのだと思います」

授業改善では、目指す授業の型を定めるのではなく、「もつと生徒のニーズに応え、生徒の脳が活性化する深い学びのある授業づくりをする」といった方針だけを示し、教師一人ひとりができることに取り組んだ。

「学校としては、大きな方針を示すにとどめました。それだけに、教師の主体性が問われましたが、一気に頑張り過ぎずに進められたことが、継続的な改革につながり、とてもよかったです」(榎本先生)

授業改善の方法は教師個々に任せる一方で、担当教科以外の授業見学を促したり、外部講師によるアクティブ・ラーニングに関する研修を実施したりと、授業改善につながる材料は提供した。それらが、外部から情報収集をしたり、ほかの教師のよい指導を取り入れたりする動きにつながった。例えば、数学科や英語科の教師が授業でアクティブ・ラーニングを行うと、それを参考に、他教科でも授業に取り入れるという自然な動きが見られるようになった。

以前は、教師個々で作成していた定期考査の問題を、各教科で学年共通としたのも、指導の方向性をそろえるのがねらいだ。国語科の三好純代先生は次のように語る。

「定期考査の問題は、その学年を担当する

教師が集まり、かなりの時間をかけて作成しています。定期考査を共通のものにしたことで、おのずと授業のレベルや進度などを共有するようになりました」

例えば、英語の定期考査は、学年共通で初見の英文を用いた問題を作成している。授業で初見の英文を読む力をしっかり育まないと、学級間で平均点に差が出てしまう。そのため、教師間で授業のポイントを共有し合うようになり、それが指導力の向上にもつながっている。

「『学力向上進学重点校』の指定を受けて、教師間で指導や評価を共有することに努めました。他教科のよい取り組みを、自教科でも取り入れるなど、教科間でも切磋琢磨しています」(平副校長)

## 夏季講習や受験直前期の指導を見直し、学習に集中できる環境に

一部の教師が個人的に行っていた夏季講習の充実も図った。これも、全校一斉の取り組みではなく、各教科で推進し、その効果を見ながら年度を追って徐々に拡充してきた。09年度では3年生は8講座、1・2年生は2講座だったが、16年度はそれぞれ16講座、17講座を実施した。

「本校では、夏休みも、生徒・教員ともに部活動に熱心に取り組めます。部活動と学習の両立を考慮して、今後も無理のない範囲で

継続したいと考えています」(榎本先生)

受験直前期の指導も見直した。以前は、1月のセンター試験直前になると、3年生の生徒は自宅で学習を始めるようになり、登校してくる生徒の人数が少ない日もあった。

そこで、理系のクラスであれば、センター試験対策として国語や地歴・公民の学習の追い込みの時期となる1月前半にそれらの授業を実施し、数学や理科の授業を1月後半にずらすという時間割の組み替えを行った。さらに、体を動かして心身ともに気分転換ができるよう、通常週3時間の体育の授業を少しでも増やすようにした。すると、授業に出席する生徒が増え、12年度には32%だった1月の欠席率は、13年度には4%に激減した。

「生徒が教室に集まれば、自然と一緒に学習する雰囲気になります。生徒同士が教え合ったり、励まし合ったりすることは、自宅で1人で机に向かうことでは得られない効果があることに気づくようです」(榎本先生)

## 部活動を通して信頼関係を構築し、受験に向かう一体感を醸成

同校では、以前は多くの生徒が個々の力で受験に向かっていたが、「学力向上進学重点校」の指定後は「高校からは団体戦」「チーム川和で受験を戦う」といった方針を強調し、生徒の

意識づけや校内の雰囲気づくりに努めている。

その土台となるのが、部活動だ。生徒の部活動加入率は95%を超え、全国的に活躍する部活動も多い。そのため、1・2年生では部活動に全力を注ぎ、3年生の引退後に大学入試対策に取り組み始めるという生徒も多かった。現在は文武両道を旗印に、入学後から学習と部活動を両立する大切さを何度も説明している。

「1年生からしっかりと授業を受けていれば、引退まで部活動に集中しても、大学入試を乗り越えられると強調することで、生徒は安心して部活動に取り組みます。そして、部活動を通して培われる最後までやり抜く力や仲間を尊重して協力する力が、学習に生かされるという好循環が生まれています」(平副校長)

部活動に熱心に取り組むことで、生徒同士、生徒と教師の信頼関係も築かれている。

「赴任当初は、生徒があまりに熱心に部活動に打ち込む姿に驚き、心配するほどでした。しかし次第に、部活動は本校の教育活動の土台となっていることに気づきました。生徒は教師を信頼して、授業中も集中して話を聞いていますし、学習や進路の相談もしています。また、卒業生や上級生が、自らの経験を踏まえた学習や進路に関するアドバイスをすることも、日常的に見られます」(三好先生)

同じ部活動の生徒はもちろん、異なる部活動に所属する生徒同士でも互いの活動を尊敬し、

刺激し合っている。そうした関係は、授業中や放課後の自主学習などの場での自然な学び合いにもつながっている。

学習と部活動の両面で校内が一体となる指導を強めるにつれて、生徒は教師を積極的に頼るようになり、放課後に質問に訪れる生徒が増えた。塾や予備校で出された問題について質問されることもあるが、教師はそうした質問にも丁寧に答える。必要に応じて塾や予備校とも連絡を取り合っており、指導に生かしている。

## 継続的な模試で学力を把握し、自信を持って受験に向かう生徒たち

生徒が目標を持って授業に向かえるように、有効活用しているのが模試だ。以前から各学年で模試を実施していたが、学年によって模試の種類が異なり、学力の推移を把握しづらかった。そこで、11年度、全学年ですべての模試をベネッセの進研模試に統一。例えば、1年生では、7月、11月、1月に進研模試を行い、生徒自身が前回からの学力推移を客観的なデータで把握できるように環境を整えた。その結果、生徒は自分の学力の伸びを見通せるようになり、進路目標を具体的に持つようになったという。また、模試は、教師の指導の後押しにもなっている。

「毎年同じ指標で見えていくことで、部活動に一生懸命に取り組んできた生徒は、3年生

秋の模試の結果がよくななくても本番では合格するケースが多いことを客観的なデータとして確認できるため、生徒に学習と部活動の両立の大切さについて説明する材料となっています」（榎本先生）

## 生徒の意識と行動の変化を受け、教師の改革意識が高まる

生徒の中に学校や授業を大切にすることを意識が高まったことは、様々な好ましい変化をもたらしている。1年生からすべての授業を真剣に受けるようになり、苦手科目だからと低学年から学習を諦めてしまう生徒も少なくなった。そして、学校としてセンター試験への出願を推奨する方針も相まって、16年度に初めてセンター試験出願率が100%となった。それに比例して、5教科7科目受験率も高まり、14年度には27%だったのが、16年度には43%へと大きく伸びた。

こうした生徒の意識と行動の変化は、国公立大学合格者が急増した主要因に挙げられるだろう。しかも、16年度入試では3人が東京大に合格するなど、難関大学合格者数も増えている。

生徒の変容は、教師をさらなる指導改善へと向かわせている。

「改革当初は、『今の指導で十分』と考えていた教師も、生徒の変化に刺激を受けて、次第によりよい授業にしようと自ら工夫して

## 若手教師が語る、指導変革への情熱

### 温故知新をモットーに チャレンジ精神を持ち続ける

進路支援グループ 三好純代

本校の生徒は、真面目で一生懸命というのが第一印象です。そして、教師の投げかけには非常によい反応があります。赴任当時は自分に何ができるだろうかと悩みましたが、これまでの経験でよいと感じたことをすべて試そうという気持ちで臨んできました。

その1つが、生徒に情報を発信するための「進路掲示板」の設置です。模試の過去問を置くスペースを作り、生徒が自由に持ち帰ってよいことにしました。担任の先生から生徒に周知してもらったところ、多くの生徒が利用するようになり、他教科の先生方も徐々に問題プリントなどを置くようになりました。このように、本校には1人の教師の取り組みが、校内に徐々に広がっていく文化があります。特に、ベテラン教師が若手教師と一緒に取り組んでくれる姿には勇気づけられます。

生徒の学習意識が高いので、その期待に応えるためにによりよい教育を提供したいという思いが、先生方の根底にあります。そのため、授業見学などを率先して行い、新しいことにチャレンジしていこうという先生方もたくさんいます。また、外部の研修などへの参加も積極的に後押ししてもらっています。こうした学校文化を受け継ぎ、「温故知新」をモットーに、いつまでもチャレンジ精神を持ち続けたいと思います。

写真 進路関連の情報を提供する「進路掲示板」。受験情報を発信したり、過去問題を置いたりして活用している。



れるようになりました。強引に引き込まなかったことが、自然な形で学校全体の取り組みになったと思います」（榎本先生）

こうして培ってきた学校文化としての教師の一体感を、今後いかにして引き継いでいくか。そこには、管理職の役割が欠かせないと、平副校長は語る。

「本校は、校長のリーダーシップの下、個々の教師の主體的な取り組みにより改革を進めてきました。管理職は場・雰囲気構築する

こと、常にアンテナを高く張り、生徒や教師の実態に敏感でいることが大切だと考えています。それは、進学実績などの学力や進路にかかわることだけではありません。例えば、部活動の実績が落ちてくると、学習と部活動の両立による相乗効果も崩れてしまう恐れがあります。これからも、先生方の努力で培ってきた学校文化をきちんと受け継いでいるか、そこで生徒が十分に伸びているかをしっかり見定めていきたいと思っています」

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年8月号指導変革の軌跡「埼玉県立川口北高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け